小さな
気づきが
世界を
変える。

半径5メートルに「問い」を立てたアントレプレナーたち

自分がつくり出したい未来に向けて、活動する起業家たち。
その背景には、きっかけとなる自身の経験があり、
そこから生まれた問いや気づきが、事業のタネになっています。
今回は、4人のアントレプレナーの起業ストーリーをお届けします。

取材・文／笹原風花
写真／吉永智彦（23、27ページ）、
加藤隆介（25ページ）、
丸山 光（29ページ）

CASE

1

祖母の**自宅介護**を経験。
打ち手がわからず、つらい日々が続いた。

宇井吉美さん

うい・よしみ●株式会社aba代表取締役CEO。ケアテック領域の第一人者である富山 健先生の下で学びたいと、千葉工業大学先進工学部未来ロボティクス学科に進学。2011年、在学中に起業。「支える人を支えたい」という思いから「船橋ワーキングマザーの会」の事務局も務める。

株式会社aba

最先端のロボティクス技術で、介護業界の変革に挑むケアテック企業。排泄ケアシステム「Helppad」を開発・販売するほか、集積したデータを基に業務フローの最適化を図るツールなども開発している。

支える人の「わからない」をなくせば、介護は「したくなるもの」になるのでは?

支える人を支えたい。この思いが、私を突き動かしてきました。介護に携わる人は、国内に900万人以上。特に排泄ケアの負担は課題になっています。ケアする人の「オムツを開けずに中が見たい」という声に応えて開発したのが、臭いで排泄を検知し、オムツ交換のタイミングを通知するシステム「Helppad(ヘルプパッド)」です。

技術の力で介護の課題解決を目指す研究を知ったのは、大学のオープンキャンパスでのこと。介護ロボットを見て、これだと思いました。というのも、私は中学生のころに祖母の介護を

経験し、大変さを痛感していました。また、当時はインターネットの黎明期で、デジタルテクノロジーの可能性に魅了されていました。これらを掛け合わせたのが、介護ロボットだったのです。

介護施設で排泄介助の壮絶な現場を目の当たりにした経験から、大学では排泄検知センサーの研究・開発に取り組みました。介護現場の方々のためにも製品化を目指していたのですが、企業との共同プロジェクトの話が流れてしまって。「自分で会社を作る選択肢もある」と言われたのをきっかけに、初めて起業を意識しました。そして、ビジネスコンテストに応募したり、起業家をはじめさまざまな方に相談したりするなかで、起業を決意しました。

起業して数年間は、介護施設でも働きました。そこで実感したのが、介護の楽しさでした。祖母の介護がつらかったのは、やりたくても打ち手がわからなかったから。ケアラーの「わからない」をなくせば介護は「したくなるもの」にできる、それをテクノロジーで実現しようと、思いを新たにしました。

起業から約10年。ようやく商品・サービスとして提供できるようになりました。学生時代の私は、電子回路もプログラミングも苦手。でも、実現したいビジョンや情熱は人一倍ありました。自分一人では実現できないからこそ、それが得意な人たちを巻き込みながらここまできました。相当熱っぽく語っているようで、取締役の谷本は、「宇井が見ているビジョンが見えた。それが実現した世界を見てみたい」と仲間になってくれました。

ここまで諦めなかったのは、「大したことのない私が失敗したって、大したことはない」と開き直れたから。だからこそ、「じゃあ、やってみるか!」と前向きになれたんだと思います。

2023年秋には、尿・便が識別可能になるなどより進化した「Helppad2」を発売予定。
※仕様および外観（形状や色）は変更する可能性があります。

CASE

2

被災地での活動で、**新たな産業**なくして復興はないことを実感

佐々木道彦さん

ささき・みちひこ●南三陸ワイナリー株式会社代表取締役。大学卒業後、ヤマハ株式会社にて商品開発・新規事業開発に携わる。退職して仙台に移住し、プロダクトの企画・開発に携わるなかワインと出合う。2019年に南三陸町に移住・起業し、翌年、ワイナリーを開業。

南三陸ワイナリー株式会社

「南三陸のみんなとおいしくなりたい」をコンセプトに、南三陸の食材と合うワインを醸造。ブドウ栽培、ワインの海中熟成、収穫祭、ワイン会、生産者との交流イベントなど体験型コンテンツにも力を入れている。

新たな産業でまちを活気づけ、南三陸の豊かな食文化を伝えるには?

私は今、宮城県・南三陸町でワインを作っています。南三陸町は、山と海がつながった循環型の土地で、海産物から野菜や米、豚、羊、牛まで、食材の宝庫です。一方、東日本大震災により人口減少が加速し、2045年には現在の約半数になると言われています。南三陸の豊かな食文化を多くの人に知ってもらいたい。新規事業により街を活気づけたい。そんな思いから、南三陸の食材に合うワインを生産しようと決意し、移住・起業を決めました。

そもそものきっかけは、東日本大震災後に

参加した、東北でのボランティア活動でした。当時は、大手楽器メーカーで商品開発や新規事業開発に取り組んでいましたが、次第にアプリやインターネット配信サービスの開発が中心になり、顧客とのリアルなコミュニケーションがなくなってきたことに違和感を覚えていました。そうしたなか、全国から集まった思いをもった人と一緒に瓦礫の撤去作業などをしているうちに、人とのつながりを大切にしながら被災地のために何かできないか…と考えるようになったのです。

被災地に身を置いて実感したのが、高齢化や人口減少が止まらないなか既存の産業の復旧には限界があり、新しい産業を生み出さないと人や賑わいは戻ってこない、真の復興にはつながらないということでした。そこで、新規事業開発の経験を活かして被災地で何か新しいことをやろうと考え、2014年に仙台に移住しました。

その後、仕事でワイングラスを手がけたことをきっかけに、誰かと楽しむ、みんなで楽しむ、食と一緒に楽しむというワインの魅力を知り、ワイナリーをやりたいと思うようになりました。宮城県内のワイナリーで手伝いながらワイン作りを学んでいたところ、南三陸町でワインプロジェクトが立ち上がったことを知り、「これだ!」と思い移住体験ツアーに参加。地元の人と話し、南三陸のことを知るにつれ、ここでワイン作りをしたいという思いが強くなりました。

ここでやると決めてからは、「なぜワインなのか? なぜ南三陸町なのか?」という問いを掘り下げながらコンセプトを練り、まちの人に伝え続けました。また、町のイベントなどに出店してワインを飲んでもらう機会を設け、畑にも通い続けて私たちの思いを理解してもらえるよう努めました。当初あった不安の声も応援へと変わり、多くの人に支えてもらいながら2020年にワイナリーを立ち上げました。

私が大事にしているのが、地域の生産者と一緒になって南三陸ブランドを構築していくこと。「みんなで地域を盛り上げる」という根っこの部分に共感してくれる人の輪がどんどん広がって、ブドウの栽培や収穫を手伝ってくれる人は累計で2千人以上になりました。ワインは、人と人、人と食とをつなぐ食文化のハブです。体験型ツーリズムなど思い描いてきた事業計画を一つひとつ実現し、持続可能な地域社会を構築するのが今の目標です。

地元のリンゴを使ったシードルや、漁師さんの協力の下、海中熟成させたワインもある。

CASE

3

予期しない妊娠を経験。性についてきちんと知っておきたかった。

染矢明日香さん

そめや・あすか●NPO法人ピルコン理事長。慶應義塾大学卒業後、民間企業でのマーケティング職を経て、2013年にNPO法人ピルコンを設立。生徒、教員、保護者などを対象にした性教育講演のほか、イベントや啓発資材の企画、動画の制作・発信、政策提言などを行う。

NPO法人ピルコン

中高生に向けた性の健康の啓発活動を行う団体。医療従事者などの専門家の協力を得ながら、若者には性について学び、語り合い、相談できる機会を、大人には子どもへの性の伝え方を学ぶ機会を提供している。

性についての正しい知識を届けられたら、同じ思いをする人を減らせるのでは?

私は現在、仲間と共に、中高生に正しい性の知識を伝えるための活動をしています。きっかけは、私自身の予期しない妊娠でした。当時は大学3年生で、就職してバリバリ働きたいと思っていた私は、悩んだ末に中絶を選びました。自分を責める気持ちやつらく苦しい思いは、計り知れないものでした。

翌年、授業のなかで、関心のある社会課題について解決のためのアクションを起こす、という活動に取り組みました。自分や友人の問題意識を共有し、私たちのチームは避妊をテー

マに選びました。当時の中絶件数は、年間約30万件。自分と同じようなつらい経験をしている人がこんなにいるという現状にショックを受けると同時に、性や避妊についての教育をきちんと受けてこなかったのは社会に課題があるのではないかと感じました。私たちの発表を聞いた周りの学生の反応も、「中絶件数ってそんなに多いの!?」という感じで。自分たちももっと知りたい、みんなにももっと知ってほしいという思いから、授業後も学生団体「ピルコン」として活動を継続。今以上に偏見の強かった中絶やピル、避妊などについて勉強し、勉強した内容を学生に向けて発信していきました。

私はもともとボランティアなどに積極的に参加するタイプではなかったのですが、原体験を通して社会課題に気づき、これまでなかった知識を学びながら届けていくピルコンの活動にやりがいや面白さを感じていました。一方、企業で働きたいという思いも強く、卒業後は就職。ピルコンの活動は次第に下火になっていきました。

転機は入社3年目でした。仕事は楽しかったものの、自分が本当に必要だと思えるもの、世の中に広めたいものを発信したいと思うようになって。それってなんだろうと考えたときに、学生時代にピルコンとして伝えてきたことだと行き着いたんです。自分がしたようなつらい体験をする人を減らしたい。未然に防ぐには、誰にどんな情報を届けたらいいだろう。そう考えていたときに、秋田県の事例を知りました。中高生に性教育を実施したところ、10代の中絶率が大きく下がったというのです。そこで、学校を通して中高生に向けて性教育を届けようと、活動のターゲットを決めました。

自分の可能性を試したい、挑戦したいという思いが強く、法人化しました。右も左もわからない状態でしたが、集まってくれた仲間のなかに、会計に強い人、NPO立ち上げ経験のある人などがいて、力になってくれました。私自身も含めて仲間に共通するのが、チャレンジを楽しめる、ということ。うまくいく保証はないけど、こうしたらできるんじゃないかと前向きに挑戦できる、ワクワクできるんです。なぜなら、誰もが自分らしく生き、性の健康と権利を実現できる社会にしたい、自分と他者の心と体を大切にできる社会にしたいというビジョンを共有しているから。これからも生きるための力を育むためのポジティブな性教育を、若い世代に届けていきたいと思います。

人生のデザインに必要な探究型学習をサポートする教材サイト「ライフデザインオンライン」（https://lifedesign.pilcon.org/）も運営。

CASE

4

東京生まれ東京育ちで「田舎」がない。いつか地方でも暮らしてみたい。

川元一峰さん

かわもと・かずみね●東急株式会社 ホスピタリティ事業部 事業戦略グループ 主査。2011年に入社し、経理担当を経てグループ企業に出向。エリアマーケティングや構造改革に従事する。その後、株式会社東急ホテルズへ。「TsugiTsugi」を立ち上げ、現在はその責任者を務める。

TsugiTsugi

都市型ホテルからリゾートホテル、グランピングまで全国の多様な宿泊施設を定額で利用できるサービス。宿泊日数によりプランを選べ、旅するように暮らしたい、ワーケーションをしたいといった層に支持されている。

働く場所や時間に制約がなくなれば、旅するように暮らせるのでは?

東急(株)(以下、東急)には、チャレンジする企業風土を醸成することを目的にした、「社内起業家育成制度」があります。この制度を利用して私が2人の仲間と提案・実装したのが、定額制回遊型住み替えサービス「TsugiTsugi」です。定額の利用料で、全国180あまりの宿泊施設を自由に利用できます。

私は東京生まれ東京育ちで、帰省する田舎がある友人がうらやましくて。東京以外の場所での暮らしや地縁に憧れがありました。大人になってからも、今の仕事を続けながら地方に移

住できたら面白いなと考えていました。

まだ在宅勤務が一般的ではなかった2016年、経理の仕事をするなかで、会社から個人に支払われる交通費の非課税上限額（月額）が15万円に拡大することを知りました。調べたところ、東急本社のある渋谷からだと限度額内で長野県の上田まで行けて、北陸新幹線は全席にコンセントが付き、トンネルでもWi-Fiが使える仕様になっていて。今後は地方に住んで通勤時間に仕事をする人が増えるんじゃないか、働く場所や時間の制約がなくなるんじゃないかと考えました。そして、自分ならこうしたいという思いから、「旅するような暮らし」をコンセプトにした事業案を社内起業家育成制度に応募したのです。当時は居住地として空き家の活用を考えており、実現性の低さから落選。一方、着眼点や発想は面白いと言われたこともあり、完全に諦めはせずに業務外で検討を続けていました。

グループ会社で組織の構造改革に携わった後、2020年4月に東急ホテルズに出向しました。業界全体がコロナ禍の大打撃を受けるなか、東急ホテルズにも構造改革が求められ、私はその要員でした。あるとき東急ホテルズの社長（当時）から、「コストカットだけでなく、新しい稼ぎ方を考えなさい」とだけ書かれたメールが送られてきました。その瞬間でした、「空き家じゃなくてホテルでやればいいじゃん!」とピースが噛み合ったのです。その足で社長室に行って提案すると、「いいね、すぐやろう」と。翌月には東急の社長の前でプレゼンをして、TsugiTsugiの先行体験を実施することが決定しました。コロナ禍によりリモートワークが浸透したこともあり、先行体験では大きな手応えを感じました。その後もプランや提携施設・サービスを拡張し、現在は第3弾を実施中です。

社内起業では、いわゆる起業とは違い、最終判断は会社がします。予算も獲得しなければなりません。だからこそ、OKをもらうためにはどうしたらいいかを戦略的に考えて行動しました。自分の思いはもちろん会社にとってのメリットも訴えなくてはなりませんし、社内に自分の仲間や味方を増やさなければなりません。そう考えると、自分がやりたいことを実現するためにはどうしたらいいかを考え、諦めずに模索するというのは、組織で働く人にこそ大事なマインドなのかもしれませんね。

北海道から沖縄まで全国約180の施設に定額で泊まり放題。同伴者1名も無料。